
詐欺師も所詮は男であって・・・

もこりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詐欺師も所詮は男であつて・・・

【Zコード】

Z2126BA

【作者名】

もりりん

【あらすじ】

天才詐欺師の椎名紫闇の今度の獲物は、ファミレスで働くおつとり少女の十六夜美姫。

彼女をターゲットとして一緒に暮らすことになつたが彼女の実家はあたりでは有名なやぐざ一家！！

騙せば殺され、事實を言つても殺され、別れても殺される…

そんな紫闇に残つた選択肢は、美姫とうまく付き合つていくことだけです！？

事実は小説よりも奇なり

「えっ！もしかして私・・・、騙されたの？！」

詐欺師の手に掛かつた者たちは、今宵もこの言葉を静に呟いている。

今回の獲物は世間知らずのお嬢様だった。俺、椎名紫闇しいなしづらはたぐいまれなる技で結婚を夢見る女性に近づき、罠にはめる。いわゆる結婚詐欺師だ！

そして俺の個人情報は一切手に入らない。名前も履歴もその場しおぎのもの・・・。

そんな俺の次のターゲットととして選ばれたのは、俺が前から気にかけていたファミレスで働く少女。

おつとりとした雰囲気を持ち、この世の汚い部分など何も知らない現代では珍しいタイプの少女だった。

だが、その割には身につけているものはどれも高級品ばかり・・・。容姿もまずまずだつた。

詐欺師にとっては夢のようなターゲットだ。

俺はさっそく作業に取り掛かった。

ファミレスに行き席に着くと、なんと彼女の方から声をかけてくれた。

「いらっしゃいませー！」注文がお決まりになりましたらそちらのボタンでお知らせください」

彼女はそう言つてボタンを指さすと、お盆から水を持って俺の前に置いた。

「ありがとうございます」

いつものパターンならここで俺がコップを倒して会話の輪をひろげる。

多少ベタだが『事実は小説よりも奇なり』なんてことわざがあるし、それに世間知らずの奴には多少怪しくても大丈夫だったりもある。むしろいつ出会こを望むロマンチストだつているはずだつ！――

だが、今回はいつもと勝手が違つた。

彼女が「はい」と紫闇の目の前に置こうとしたコップは彼女の手からこぼれおち、なんと俺の顔面にコップの水が思いつきリヒットした。

「あつ……」、「ごめんなさいっ！」

彼女は謝りながら布を取り出して俺の濡れた部分を拭いた。

「本当にごめんなさい・・・」

「だ、大丈夫ですよ。よくありますから」

あまりのいきなりの出来事に俺はつい言葉の選択を誤った。

今の現状は、カレーうどんの汁を服に飛ばしてしまつたとはわけが違う。

水を顔面にかけられるなんてそうそうない。

せいぜいそんな体験は別れ話を切り出した時か、いじめにあつてるかだ。どちらにしても決して良い印象をもつてはくれないだろう。

「おいっ、君ー何しとるんだ！」

どうやら騒ぎを聞きつけて責任者が来たらしい。

彼は、彼女が必死に俺の濡れた顔を拭いている布を奪い取つた。

「君ーこれは濡れた床を拭くものだと教えただろう！」

彼女は半泣きになりながら責任者さんに言い返した。

「で、でも、店長がこれは濡れた所を拭くものって・・・」

どうやら彼女にとつて俺は濡れている床と同じ扱いだつたらしい。

そして散々叱られた揚句、結局彼女は店をクビになつた・・・。

袖すつめの人生の縁

俺は仕事をクビになってしまった彼女と公園のベンチに座っていた。

「あの、さつきは本当にすみませんでした。私馬鹿だからよくあります」

彼女は申し訳なさそうにうつむいたまま何度も俺に謝罪してくれた。

「いや、全然平気だよ。それに少しラッキーだった。君と知り合った。チャンスが出来たんだから」

いつ落ち込んでいるときにこそ慰めの言葉は胸にしみるものだつ！ 彼女を虜にするには今しかない。

「ありがとうございます……。あの、お名前を伺つてもよろしいでしょうか？」

よしつ！ 彼女は段々と俺に対して警戒が薄れてきてる。いつなれば付き合つまでは割と早いはずだ！

「俺は椎名紫闇。君は？」

「私、十六夜美姫と申します」

「あのや、携帯のメアドとか教えてくれないかな？ 变な意味じゃなくて、今日こうして出会えたのも何かの縁だと思うし。急にバイトをクビになっちゃつたら色々と大変だろ？ なんでも相談に乗れるようになり・・・」

「ありがとうございます」

いつして俺らはメアドを交換した。今会話を聞いて「うんぐれこ」とか感じる奴らーそこは深く詮索するなつ！ 袖すりあつも多生の縁つていうだろ？ 今日きなり会つた密とメアド交換なんてめつたにないけど、多生の縁でも利用できるものは利用しとくもんだよ。

それから俺らはしばらべベンチで話していった。

「・・・実は私、今家出してるんですね」

「家出?」

「はい。私の父親が本当に口うるやくて、それで勢いで・・・。知り合いで協力してもらつてアパートを借りるところまではなんとか出来たんですけど、バイトクビになつちやつたから、もつ家賃が払えなくなつて・・・」

彼女にとつては大惨事だらうが俺にとつてはまんざり悪口話でもない。

「じゃ、じゃあさ、次の仕事が見つかるまでの間だけ、俺の家に来ない?」

「い、いいんですか?」

こんな怪しい話になんのためらいもなく乗つてくるのは、おそらく彼女だけなので、お勧めは出来ない口説き方だ。

俺自身、こんなにあつせりOKしてくれるとは思わなかつた・・・。

ハハして俺と美姫さんとの同居が始まったわけだ。

恩に着る

俺は美姫さんを家に連れて自宅へ帰つていた。

「ここが俺んちだよ」

俺はそう言つてドアの鍵を開けて彼女を中へ通した。

「うわ～。素敵なお部屋ですね」

彼女は部屋を一通り眺めていた。

「紫闇さんってお仕事は何をしているんですか？」

「俺？ 実はフリーターです。レンタルビデオ店のバイトしてんの」「これは嘘ではない。さすがに「詐欺師です」なんてことは絶対に言えないで、とりあえずアルバイトの方の事を言つて、フリーターということにしてあるのだ。

「へえ、レンタルビデオ店ですか・・・。すゞいですね、ちゃんとバイトを続けてお家を借りて、尊敬しちゃいます」

「そんなことないよ。俺から見たら、美姫さんの方がすゞいと思う。・・・。いきなり家出して、バイト見つけて頑張つて。今回はちょっと運がなかつただけだよ」

「いえ、違うんです。」

「何が？」

「今日のバイトで5回目なんです。クビになつたの」

俺はその話を聞いた後に「えつ」と言葉を漏らしてしまつた。確かに今日の彼女の失敗は偶然なんかでかたづけられるようなことはなかつた。しかし、まさか5回もチャンスを無駄にしていたとは・・・。

「私、本当に馬鹿ですよね・・・。今日だつて紫闇さんに助けてもらわなかつたらどうなつていたか」

「いや、俺は美姫さんみたいに可愛い人とこつして一緒に暮らせることになつてすつじい嬉しいし、俺は美姫さんのそういうおつとりしてるとこか、嫌いじゃない」

俺は美姫さんから視線をそらした。

勿論これは演技上のセリフだが、女の子にこんな言葉を言うのは何回やつても慣れないのだ。

「ありがとうございます！私も紫闇さんの事、大好きですっ！」
「だ、大好きっ！？」

出会つてものの数時間でそんなことを言われたのはおそらく詐欺師人生で初かも知れない。

「だつて、見ず知らずの私を自分の家に置いてくれるなんてそういうことだし、紫闇さんのそういう優しいところが私は大好きです」

美姫さんの輝くような瞳に俺は一瞬心苦しくなつてしまつた。彼女のよくな純粋な目が俺の一番嫌いなものだった。

どうやら彼女にとつて俺のとつた行動はそうとうにありがたいものなのだろう。

まあ、早い段階で色々と恩を着せといた方が仕事も早く済みそうだし、詐欺師としては中々の展開だ。

それから美姫さんに夕食を作つてもらい、一人でそれを食べていた。彼女は意外に料理は結構上手かつた。

そのあとは、色々と世間話をしていた。一人に訪れた穏やかな時にそれは突如起つた。

「おい！ちょっと邪魔するぜっ！」

いきなり扉を蹴り破つて厳つい男どもが入つてきた！

奴らは俺と美姫さんの手を縛り、車に乗せた。

「あ、あなた達は・・・」

さすがに動搖しているのか、美姫さんの声は震えていた。

「お前らはなんなんだよ！」

俺も美姫さんの後に大声で叫んだ。

「テメーはおとなしくしてろ。そうすれば手荒なことはしない」

俺達は満月があたりを照らす中、何もできずにただ先の見えない

道を進んでいった。

人はみかけによらない

俺と美姫さんは謎の男達に連れられて、とある屋敷にやつってきた。そこには木造建築で、庭や外觀を見ただけでも和風といつ雰囲気がそこら中に漂っていた。

何も申し分ない屋敷あつたが、ただ一つ不安に思うのは俺の前に現れる屋敷の男どもが全員こわもてだったということだ。

車から降ろされて屋敷の中に入ると美姫さんは別の部屋に連れてこられた。

俺は今にも心臓が張り裂けそうな勢いのまま和式の部屋に連れてこられると、乱暴にそこに捨てられた。

部屋の中には周りにこわもてが数十人くらいいて俺を囲むように立っていた。

さりにしばらぐすると、じいづらの親分のようなおっさんが部屋に入ってきて、俺の前に座り込んだ。

「テメー、ここをどこだか知つてんのかい？」

随分と低い声でしゃべる相手に俺は恐怖の限界を感じていた。

「い、いや～、さっぱり。でも、みなさんやはつぱり、ど、どこのやくざさんとかですよね～」

俺はなるべく怒りを買わないようなしゃべり方をした。おそらく無駄だらうが・・・。

「俺らはよ、やくざの世界じゃ誰でも知つてゐる関東やくざ一家の一角。常夜の十六夜一家と聞きや～、逆らつものはねーんだよ？堅気には聞きなれねー名前かも知れねーがな」

「い、十六夜組つ？！」

俺もどちらかといえばそっちの世界の人間だから、その名前は何度も聞いたことがある。おそらく、本当の堅気でも、知らない奴はないだろう。

俺らの世界では、常夜一家と言われば通じてしまう、最も関わってはならないやくざ一家として有名だつた。

「そ、その名前なら十分聞き及んりますっ！…そ、それでっ、俺に何か用でも？」

「しらばつくれてんじゃねーよ？うちの一人娘をたぶらかしといてよつ。身に覚えがないとは言わせねーぞ！」

たぶらかした覚えなら何度もある。それが職業だし……ただ、誰がこの親分殿の一人娘なのは全くわからなかつた。

今まで騙してきた数もさることながら、それっぽい奴も騙した中には何人か混ざつていたからだ。

「お、覚えがないというか……本当にそれは、俺なんでしょうか～？」

「はつ？！」こつちはな尾行してしつかり証拠押えてんだよ…テメーはやくざ界のルールに従つて死んでもうぜい」

俺はその言葉と同時に親分が懐から取り出した短刀を見て、命を終わりを察した。

親分が勢いよくそれを身動きの取れない俺に突き刺そうとした、まさにその瞬間だった。

「パパッ！！いい加減にしてください！」といつ声とともに思い切り開いたふすまの音で、親分の短刀は俺の胸の一ミリ先で止まつた。命を救つたと、涙を流しながら親分を止めた声の方を見ると、そこには美姫さんが立つていた。

「み、美姫さんっ！」

俺の声に気が付き、駆け寄ってきた美姫さんは「ごめんなさい…

・」と呴きながら俺の手のロープをほどいてくれた。

「美、美姫さん。君つて、この一家の子供だつたの？」

「はい・・・」

美姫さんは一度も俺と目を合わせることなく頷き、一家の親分に向かつて怒りだした。

「パパッ！この人は私の命の恩人だつて何度も話したじゃないです

か！－この人は私をたぶらかすどころか、行き場のない私を何も言わずに救つてくれた大切な方なんですか！」

「で、でも！パパに内緒で、年頃の娘が男と一つ屋根の下なんて…」

・

「パパは私にちくいち見張り役をつけてるじゃないですか…家出した後もつ。わざわざ言う必要ありません」

「だ、だがな」

美姫さんへのうひうひたえぶりにさつき見た親分としての威厳が嘘のようだった。

「とにかく、もう二んなことはしないでください。紫闇さん、今夜は遅いですから、どうぞ家にとまつてください。部屋を用意させますから」

「い、いや俺は…」

「早くここから逃げ出したいですか？」

「いえっ！ぜひ泊まらせていだきますっ！」

俺はとうさんに心にもないことを言つてしまつた。厳密にはとうさとこうよりも、断られそうになつた時の美姫さんの悲しそうな表情を見た、いかついお兄さんたちからの視線に根負けしたのだ。

その日の夜、俺は全く寝付けなかつた。美姫さんがまるで宿屋のような立派な一室を用意してくれたのだが、やくざ一家の家と聞いてぐつすり寝れる奴なんてこの世のどこにもいないだろう。

それにもまさか美姫さんが常夜一家の娘だつたとは。人はみかけによらないなんて言葉は彼女にこそふさわしい。

そんな事を考へていると、ふすまをたたく音で俺は布団から起き上がつた。

「はい？」

「あ、あの、美姫です」

俺の部屋に訪れたのは美姫さんだつた。

するのち失敗、何もしないのは大失敗

部屋に訪れた美姫さんを部屋に通すと、彼女はいきなりこの二つ語りってきた。

「しばらくはここには誰も来ないと思います。今のうちに逃げてください。後は私がなんとかしますから」

あまりにも予想だにしていなかつた言葉に俺は混乱してしまつた。

「なんでいきなり・・・」

「紫闇さん、早く帰りたいと思つてるでしょ？」

俺はあまりにも的確な答えを出されてしまい、心拍数が少し上昇した。

「なんでそんな事・・・」

「ここに来る一般人はみんなそういう顔をするんです」

「えっ？」

「どんなに仲良くなつた子だつて、私の事情を知れば遠ざかつて行つてしまつ。だから私はそのうち自分から人と関わらないようになつていきました。だから、紫闇さんがなんのためらいもなく私を受け入れてくれてとてもうれしかつたです。・・・でも、ふと気がついたんです。あなたが優しくしてくれたのは私の事情を知らなかつたからなんだと。紫闇さんが本当は逃げ出したいというのならつ」

「俺は、ここから逃げねーぞ」

「えっ？！」

俺は自分で驚くような言葉を出した。おそらくここから逃げ出せる唯一のチャンスを逃したのだから。

「俺がここから出て行くときは、お前も一緒に連れていく

「でも、私の事怖がつていいんじや？」

「俺が怖がつてたのはやくざであつて、お前じやないよ。たとえお前がどんな事情を持っていたとしても、俺がお前を好きなのは変わらない」

「す、好きつ！？」

俺はついヒートアップしそぎて自分でも気がつかない辺りにどんな事もしない事をいつてしまつた。

「す、好きつてのはあれだぞつ。お前の性格を嫌いになれないつてことで！」

「いりなるとなにを言つても、そういう意味にしか聞こえなくなつてしまつた。

「ど、とつあえず！俺はこの世で誰からも愛されている奴がいないと思つし、逆に誰からも愛してもらえない奴だつていないとおもう。外の世界がお前の事を拒むなら、俺がお前の友達になつてやるからつ」

その言葉を聞いた美姫さんは「ありがといります」と言ひながら泣き出してしまつた。

それにしてもあの言葉を言つてからのこれはどう聞いても告白にしか聞こえないのは俺だけだらうか・・・。言つておくけど、俺はそういう意味で言つたわけではないから！ただ、こんだけ純粹な奴がこれ以上傷つく姿を見たくなかつただけで。第一、俺とこいつとは詐欺師と獲物の関係だつてことを忘れるなよつ！

俺はあくまで詐欺師として、こういつ事を言つているんだからな。するのは失敗、何もしないのは大失敗つて言つようにて、俺はたとえやぐざの娘であろうと騙しぬいて、生き抜いてやるんだ。

「だから、逃げるなら一緒につ」

バンツー！

気を取り直して、美姫さんに話しかけた俺の声をかき消す勢いでいきなり部屋のふさまを開けたのは彼女の父親だつた。

「話は全部聞いたぞ。ちょっと来てもらおうかつ！！」

父親の顔はとても恐ろしい顔をしていた。まさか、俺のあの告白ともとれる言葉を聞いてしまつたのだろうかつ。

それとも、泣いている娘を見て何かを勘違いしているのかつ。

どちらにしろ俺は命の最期を改めて予感した。

アワハの眞の片思い

俺と美姫さんは美姫さんの父親に連れられて、誰もいない部屋に来た。

部屋に入ると父親は美姫さんに尋ねた。

「美姫、さつきの話だが、お前はその男に告白されたのか？」

父親の率直な質問に対しても美姫さんは頬を赤らめながら答えた。

「は、はい・・・

えつ？！ そうだったっけ？！

彼女に悪気はなかつたのだろう。だが、おそらく恋愛経験や同い年の男性との関わりがあまりに少ないとから、俺のあの言葉を思いつきりプロポーズと勘違いしてしまつっていた。

「そうか・・・。お前はどうするんだ？」

「わ、私も紫闇さんのこと、大好きです！」

えつ？！ そうだったの？！

まさか、この短時間でこんなにも彼女が俺を思つていたなんて想像もしていなかつた。俺にとつては彼女ができるといつより、年下に懐かれたような感覚でしかなかつた。

その後彼女の心の内をすべて聞いた父親は美姫さんを先にさがらせ、しばらく俺と父親との沈黙が続いた。

「・・・おじつ、お前つ」

先にこの沈黙を破つたのは父親だつた。

「はいっ！」

「お前は、本当にあいつを愛しているんだるうな？」

「えつと・・・、あ、あれはプロポーズというわけでは・・・

「なにつ？！」

俺の言葉を聞いた父親の顔が恐ろしい形相へと変わつていつた。「ブ、プロポーズとかそんなのではなく、彼女の昔の話を聞き、今でも変わらず苦しんでいるあの子の心を少しでも楽にしてあげるた

めに、まずは彼女の悩みの種のうちの一つである交友関係を俺と友達になることで晴らしてあげようという事で・・・

俺はなるべくさし障りのないよう、先ほどの誤解を解こうとした。

すると、話を聞いた父親は立ち上がり、段々と俺のそばに歩み寄ってきた。まるで鬼神が歩み寄つて来るかのようなその威圧感に俺はどうする事も出来ず、ただ固まっていた。

俺の目の前まで来た父親はしゃがみこみ、彼の右手を大きく振り上げ・・・、俺の肩に置いた。

「お前のような男を待っていたぞ!」

「は、はい?」

俺は言葉の真相が全く読めなかつた。ポカーンとしている俺の顔を見ながら父親は笑顔で俺に話しかした。

「今まであいつの元に来た求婚者は、いずれも詐欺師か遊び人のチヤラ男だつた。だが、お前はそのどちらでもない」

せ、先人がいたー!!

まさか、俺以外にもあいつを狙つていた詐欺師がいたとは・・・。

「あ、あの～ちなみにその方たちはその後どうなつたんでしょうか?」

「チヤラ男はわしらを見た瞬間、脱走したために島流しにした。詐欺師は、最後まであいつを騙し続けたのに気付き、我らのルールで抹殺した」

詐欺師の先輩は先にあの世に葬られていた事に気が付き、俺は一気に目の前が真つ暗になつた。

「そんな事が続いたためか、そのどちらにも似つかわしいお前を少々危険視していたが、わしの勘違いだつたようだな」

なぜ勘違いという結論にたどり着いたのかは知らないが、さすがはやくざの頭だけあつて、勘は鋭いらしい。

「なぜ、僕はそいつらとは違うとお考えになつたんですか?」

「お前はしっかりと順序をわきまえていたからだ」

「順序？」

「初めはあの言葉を告白かと思ったが、あれはわしらの勘違いで、お前はお友達から始めてくださいと言ったかったのだろう？」

えっ・・・。さらに勘違いされているー！！！

まさかあの誤解を解くための言葉をさらに誤解されて聞かれていたとは・・・。

「美姫も今までの誰より、お前を気に入っているようだしな。これからもあいつの事をよろしく頼むぞ。それから、同居も認めてやる。これは完全にアワビの貝の片思いというやつだ。

まあ、最悪の事態は逃れたし、これも一種の逆転劇なのだろうか。

ひつして、俺と美姫の恋愛劇場が幕を開いたのであった。

猿も木から落ちる

太陽がまだ昇りきらない明け方、俺はようやく美姫とともに自宅に帰還した。

あの後、美姫の父親でありやぐれ、十六夜一家の親分の座に就く十六夜京輔から美姫と同居するにあたって守らなければならぬ規則を言いつけられた。

? 美姫を泣かせない事

? 美姫に嘘をつかない事

この他にもまだまだ規則はたくさんあるが絶対に守らなければならぬのがこの二つだった。

まあ、簡単にいえばこれらの規則を破れば問答無用で殺されるという事だ。そう思つただけで頭がさえてきてしまい、結局その日は一睡もできなかつた。

自宅に帰つてもそれは同じ事だつた。

「紫闇さん！」

頭を抱える俺に、そんな撻など何一つ知らない美姫が話しかけてきた。

「どうしたんですか？ 美姫さん」

「あの、台所を借りてもいいですか？」

「はい、別に良いんですけど・・・」

俺の返事を聞くと嬉しそうに美姫は財布を持つて、どこかへ向かつて言つた。

その後俺は気持を入れ替えよつと風呂に向かつた。

風呂にはいつてしまらくすると、ドアが開く音が聞こえた。さつき出て行つた美姫が返ってきたのだろう。

俺は風呂場から上がり、髪をタオルへ拭きながら居間に戻つた。

そこで俺は目を疑つた。居間のテーブルには並びきらぬほどどの料

理が置いてあつた。

「あつ、紫闇さん。お風呂から上がつたんですね！」

そういうて、台所から姿を見せた美姫さんはエプロンを身につけてフライパンを手にしていた。彼女が俺のためにこしらえてくれたものだというのは聞かずとも察す事が出来たが、とりあえず彼女に尋ねてみた。

「これ、美姫さんがつ？」

「はい、お口に合つかどうかわからぬですけど・・・」

案の定これは彼女が俺の為に作つてくれていたものだつた。

支度がすべて終わると、彼女は俺をテーブルの前に座らせた。

「昨日色々ご迷惑をおかけしてしまいましたし、ほんのお礼です」

「あ、ありがとうございます」

俺が料理を食す事を促すかのように、彼女は俺の事を、その輝いた目で見つめた。俺は田の前にある箸を手に取るが、中々料理に手が出なかつた。

食欲がないわけではない。むしろ昨日の夜から何も食べていないうからかぶりつきたいくらいだ。

だが、長い事結婚詐欺師として、女性と交際を続けてきた紫闇にはとある経験があつた。それは、料理の味だ。どんなにおいしそうに見えても、世間を知らずに育つてきた箱入り娘の料理は今までこのごとく不味かつたのだ。

彼女また、あの京輔さんに育てられた箱入り娘。さらに超がつくほどのドジなのを知つていて、そんな彼女にはたして人並みの料理が作れるのであらうか？

だが、俺にはいろんな意味で彼女の前で不味い表情を取ることはできない。たとえどんな味でも笑顔で褒め称えて、完食しなければならないのだ。俺はしばらくその覚悟を整えていたが、これ以上は彼女も待つてはくれないだろう。俺は意を決して彼女の愛情料理を口の中に放り入れた。

その瞬間、俺の全身に衝動が起つた。まるで電撃にでもうたれ

たような感覚に俺は数秒、動きを止めた。

「・・・あの、お口に合わなかつたですか？」

俺の行動を見て、美姫は心配そうに尋ねてきた。

「・・・上手い・・・」

「えつ・・・？」

「美姫さん・・・。これ、マジで上手いよ！！」

そう俺の全身に響き渡つた衝動は彼女の料理が不味かつたからではない。むしろ、とうてい一般人には出せない味をこの短時間で見事に醸し出していた。

俺の絶賛の言葉を聞いた美姫は頬を真っ赤にしながらもほっとしたように、そして嬉しそうに満面の笑みを浮かべたのだ。

その時の天使のような純粋な笑顔はきっと一生忘れることはないとだろうと思うほどだつた。

それにもしても、彼女の料理がまさかここまでとは・・・。

この手の事で、俺の予想が外れたのはおそらく初めての事だつた。これが猿も木から落ちるというやつなのだろうか。

それにもしても、彼女の前では今までの経験など、まるで通用しないのかも知れない・・・。俺は彼女の料理を食べながら、そんな事を思つていた。

案するより産むがやすい

俺と美姫が同居して数週間が経っていた。

彼女は俺と同居をする事になつてから毎日求人広告と睨み合い、仕事を探していた。現在も居間で仕事探しに頭を悩ませている。その傍らで、料理だけでなく、家事全般を引き受けってくれていた。一方俺は自室（今はとなつては一人の寝室になつてしまつた）で、彼女とはまた別の事で頭を悩ませていた。

別のこと言つても、元は彼女と同じ仕事関係の事・・・。そう、本業の詐欺師としての悩みだった。

彼女と同居してから今日まで、これといった進展が何もなかつた。そろそろデートの一つでも一人で行きたいところだ。

えっ？まだ、詐欺師として彼女を落とす気のかつて？・・・当たり前だろ！どの道、このまま結婚まで行つたつて、俺に待つている未来はこわもての野郎どもと厳つい親分に囮まれて肩身の狭い思いをするだけ。ならば、彼女を騙して大金を得てどこかへ逃亡している方がまだましだ。だが、あくまでも今までのようにな、置き手紙一つで姿を消したりはしない。美姫の納得のいく別れ方をすれば、あの親分だって強くは出れないだろうと俺は踏んでいた。（あくまで可能性だが・・・）

そのためにも、今はもつと美姫と仲良くしたいのだが、彼女は今、少しでも俺の仕事の負担を減らそと、自分の貯金を得るために仕事探しに必死のせいもあつて、とてもデートに誘える雰囲気ではなかつた。

俺は色々なデートへの誘い方を考えたが、どれも役には立たなそうだ。
そんな時、いきなり部屋のドアをノックして美姫さんが入つてきた。

「あの、紫闇さん。お願いがあるんですけど

意外な美姫の訪問に俺は思わず、後ろに退いてしまった。

「み、美姫さん！ど、どうしたんですか？」

「あの～。次の仕事の事なんですけど、面接をしてもいいという会社が5件あつたんですけど、どれにするか決めるためにそこに行つてみたいんです。でも、電車とかあんま乗つた事ないし、方向音痴なんで場所があまりよくわからないんです。・・・だから、どの辺かだけ教えてくれませんか？」

その美姫の言葉に、俺は思わずとこにチャンスを見つけた。

「あ、それなら、俺バイクの免許持つてるからそこまで連れていくよ」

俺は今を逃せば、彼女と出かける機会はしばらくはないと思んで、一か八か勝負に出てみた。

「で、でも悪いです」

「いいよー、それくらい。俺だって毎日料理や家事をやってもらつてるし。それに・・・俺、君と一緒にどこかに行きたかったんだ。迷惑でなかつたら・・・」

「め、迷惑なんてとんでもないです！」しかし、御迷惑でなかつたら、ようしくお願いします」

「じゃあ、決まりだね」

意外とあつさり彼女は俺の提案を受け入れてくれた。案ずるより産むがやすしつてことわざはほんとだつたらしい。

こうして俺は次の日曜日、彼女と一緒に出かける事になつたのだった。

芸が身を助ける

美姫と出かける約束をしてから少し経ち、ついに、その日が来た。午前10時、俺は彼女をバイクに乗せて出発した。

「でつ、最初はどこに行くの？」

「はい。まずは秋葉原に行きたいです」

「わかった。しっかりつかまってて」

俺は彼女をのせて、秋葉原にあるというバイト先候補へと向かつた。

しばらくバイクを走らせて、ようやく目的地に到着した。だが、彼女のいうバイト先が見つからなかつた。

「美姫さん。バイト先つてどの辺？」

「どこつて……」「ここですよ」

美姫さんはそういうとまん前の建物を指さした。

「こ、ここつ？！」

俺は一瞬、目を疑つた。なぜならそこには「メイド喫茶」の文字が並んでいたからだ。

「美姫さん……本当にここで働くつもり？っていつか、ここがどういうところかわかつてんの？」

「はい。ファミレスのような場所ですよね！」

美姫の言ひ事はあながち間違つてはいなかつた。だが、微妙に的外れでもあつた。

「み、美姫さん。ここはやめておいた方がいいよ

「どうしてですか？」

純粹に俺が反対している理由がわかつていない彼女に対しても、俺はなんと言つたらいいのか分からなくなつてしまつた。

「な、なんていうか、こういうところに来るのはみんな頭がかなりなくらい汚染されている奴らなんだよー基本、男のくる場所だし、

美姫さんにはちょっと向いてないかなー。なんて・・・

俺はとりあえず、出来るだけ聞こえの悪い言い方をして彼女を止めた。

実を言えば、美姫にとつてここはきっとかなりあつてているのかもしれない。美姫なら、ドジというアイデンティティーを駆使して、必ず最強のドジっ娘としてやつていけるはずだ。文字通り芸が身を助けるだろう。

だが、俺は彼女には出来るだけそうなつてほしくはなかつた。

「うーん」

彼女はしばらく悩みぬいたうえで結論を出した。

「紫闇さんがそういうのであれば、きっとあまり良いところではないんですね。わかりました、他の所にします。」

彼女の純粋さのおかげでなんとかメイドは待逃れた。だが、ひとつ目にいきなりメイド喫茶をチョイスしていた彼女に俺は嫌な予感を感じていた。

その後、彼女を連れてバイト先を巡つたが俺の予感通り、5つのうち4つがいわくつきの場所だった。

そしてそのすべてを反対し、最後のバイト先へと向かつていた。

「最後はまともであつてくれ！」俺はただ、ただそう願うばかりであつた。

そして、ついに最後のバイト先に到着した。

「あつ！ 紫闇さん、ここです！」

美姫が元気よく指さした店を俺はゆっくりと見つめた。そこにはなんと、こう書かれていた。

『キャバクラ「ノエル』』と・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2126ba/>

詐欺師も所詮は男であって・・・

2012年1月14日17時53分発行